レッスン：SPA NO.10

テーマ：生の多様性

SPA10.DOC/PYRMA11.KE5/SE

私の兄弟・姉妹たち、

スピリット、光、火の子供たちよ。私たちは常に主、絶対、聖なる神に抱かれています。

このレッスンでは引き続き生の多様性について話します。前回もいくらかこの多様性について述べてきましたが、十分ではありませんでした。かつて述べたように、生の主な特質は多様性です。絶対存在、神は一つですが、多様性のステートのなかで、無数の聖なるモナド・セルフがこの多様性のなかにあります。しかし、多様性は絶対生だけにあるのではなく、創造の諸世界の現れのなかにもあります。人間のイデアを通じた現れとしての生がありますが、しかし同時に創造界への聖霊の下降による生もあります。

それでは人間のイデアを通じたロゴス的現れを見てみましょう。そうです、魂のセルフ・エピグノシスもまたこの多様性、この特質を現わしています。魂はどのようにしてこの特質を現わすのでしょうか？その魂は多くの同一体を創造することができるのでしょうか？何の同一体でしょうか？魂の同一体ですか？しかし、魂とは何でしょうか？魂には限界、境界があるのでしょうか？どう思いますか？答えはノーであり、魂は人間のイデアのフォームだけを有しています。今私たちはロゴス的現れとしての生について、人間について話しています。ですから、

**魂(Soul)にはどんな限界、境界もありません。**

魂はこの多様性をどのようにして表現しているのでしょうか？

魂は必要なだけいくつでも同一フォーム、イデアを創造することができますが、それは魂のセルフ・エピグノシスが自己実現した後にのみ生じ、それ以前は不可能です。自己実現に到達する前に魂が表現できる唯一のものは、全体としての魂の多様性です。これはどういう意味でしょうか？生の現れの諸世界における全ての魂のセルフ・エピグノシスであり、私たちは今存在の諸世界について述べています。それは四つのヘブンであり、そこでは生は最内奥のセルフ、スピリットであるセルフの特質を完全に表現しています。さて、そのようなステートにおける魂のセルフ・エピグノシスは全体性と同じブレーシス（＊神の意思）を有しています；モナドのブレーシスは全体の多様性のブレーシスと違いがありません。

**魂のセルフ・エピグノシスからの微細なスパークの結果である生の現象としての人間についてはどうなのでしょうか？それは現在のパーソナリティーとして生まれ、（＊魂のセルフ・エピグノシスからの微細な）そのスパークは意識の中心として現れています。しかし、生の現象内にある意識には限界・境界があり、無知のなかに入って、もはや生それ自体の特質を表現していないと教えられています。**まず最初に、人間は低いバイブレーションを表現しており、いわゆる本能的意識のセルフ・エピグノシスを表現しています。多くの転生を経た後、人間はいわゆる潜在意識のセルフ・エピグノシスを表現するようになり、それは数多くの転生を通じて続きます。そして勿論、多くのワークの後に、多くの経験の後に、人間はいわゆる意識的意識のセルフ・エピグノシスを表現するようになり、人間は意識的に生きるようになります。

勿論、多くの困難なワークの後にいわゆる超意識的意識のセルフ・エピグノシスを現わし始めるようになるよう努力する必要があります。それが表現される時、それはロゴス自身によって行われる火の洗礼の始まりの結果です。そして人間は五感ではなく、五つの超感覚を表現し始めます。そして過去に述べたように、五芒星はその正しい位置にあるようになり、下向きではなく上向きになるのです。

生の現象としての人間によって多様性の特質が表現されるのでしょうか？そうです、しかし初めは意識的ではなく、無意識的に表現します。二元性の結果として、人間はあらゆる瞬間にその特質を表現しており、人間はエレメンタルとして無数の同一体を創造しています。最愛のお方によれば、それらの同一体は口の聞けないオシのエレメンタルです。勿論、群れをなすそれらのエレメンタルは人間の無知の結果であり、**それらのエレメンタルはそれを創造した人間に戻ってきます。なぜなら、人間は自らが創造したものに責任があるからです。そして勿論、原因・結果の法則があります。**

Page2

無から何かを得るということはありません。経験を通じて、それらの経験の結果として、私たちは個別性を得、気づきが上昇するのです。そして最終的に現在のパーソナリティーに何かを与えるある地点に到達します；アイコンではなく似姿を現すようになります（なぜなら、無知にある間は人間は神のアイコンであり、似姿ではないからです）。その似姿は内側から来るものですが、無知のなかにいる間は人間はそこに到達することはできません。

多様性に戻りましょう。人間がいわゆる五つの超感覚を現し始めると、人間はこの多様性を意識的に、そしてある程度まで超意識的に表現することができるようになります。どのようにして？ひとつは、同胞の人間を助けるという唯一の目的のためにいわゆるエーテル・バイタリティーの投射によってです。そして勿論、生の現象内での転生のサイクルにある間のパーソナリティーによるもっとも重要な表現は、パーソナリティーが自分の諸体をマスターしたとき、パーソナリティーが現在のパーソナリティーの自己実現のレベルに到達したときです。

**そして、今や自己実現した現在のパーソナリティーがいます。**

生の現象としての人間にこれが起きるとき、

**そのパーソナリティーは超意識的にサイコノエティカル体を肉体から分離させることができ、意識のセルフ・エピグノシスの大部分はサイコノエティカル体へと移行し、**

**意識のセルフ・エピグノシスのほんの微細な部分だけが永遠のアトムと一緒に肉体に留まり、永遠のアトムの聖霊的現れと協力して肉体を維持するという唯一の目的のために働きます。**

**そのパーソナリティーは今やサイコノエティカル体と共に実存の諸世界のすべて、つまり物質界、エーテル界、そしてあらゆるサイコノエティカル諸世界を自由に動くことができます。**

**パーソナリティーは今や最内奥の本質から、多様性の能力を超意識的に表現することができ、サイコノエティカル体の同一体をいくらでも必要なだけ創造して同胞の人間に助けを与えることができます。一から数千まで必要とする限りその数に制限はありません。**

既に説明したように、意識のセルフ・エピグノシスは量、質共に全ての同一体で同じです。二十あるいは千の同一体を作るときよりも十の同一体を作るときのほうが優れているということはありません。常に量と質は同じであり、既に述べたように同一体は一度それが作られると肉体と直接につながっています。

しかし、ブレーシス、あるいは（＊神の）意思、または神の黙想（今私たちは瞑想あるいは思考ではなく、黙想について話しています）は全ての同一体を通じて同じであり、同時に各同一体にはそれ自身の黙想とブレーシスがあり、それはまた全てのものです；つまり、各同一体は他の同一体とは異なった特定の仕事をしていますが、しかしブレーシスはすべてに共通します。この能力を理解するのはとても難しいことですが、この能力は魂のセルフ・エピグノシスとしての生それ自体、あるいは絶対存在としての絶対生の現れと比べたら無に等しいものです。

絶対存在の一部分だけが神の黙想のなかにあると考えますか？神のブレーシスの結果としての神の黙想（現れのために神のブレーシスと神の黙想があります））、それはどこで表現されるのでしょうか？それ自身のなかで、そして私たちには神の黙想の結果としての現れがあります。そして実際、現れは神自身のなかにおける神の黙想によるものです。それゆえに、全ては絶対のなかにあり、全てはアウタルキー（＊神の自足状態）のなかにあるのですが、（＊私たちは）それを認識していないのです。

この神の黙想を経験するのは絶対存在の一部分だけなのでしょうか？答えはノーです。神の黙想はモナド・セルフではなく全体としてのモナド、絶対存在の結果です。なぜなら、絶対存在としてのモナドは多様性の結果です。全体としてのモナドのなかには無数の聖なるモナドがあります。この（＊全体としての）モナドをここではセルフとしての絶対存在と呼ぶことができます。スピリット存在としての一つ一つのモナド・セルフはこの神の黙想に加わっています。しかし、スピリット・セルフが現れのためにこの神の黙想の動きに加わるかどうかは別問題です。それゆえに、加わっていないスピリットモナド存在があるのです（それらは最終的には加わるようになるのですが）。それゆえに、それらは最初、いかなるイデアを通じてもそれ自身の微細な部分をスパークさせないのです。なぜなら、この動きのなかに全てのモナド・スピリット・セルフが入るわけではないからです。それゆえに、現れには始まりも終わりもないのです。それは永遠に続きます。なぜなら、絶対存在が黙想を止めることはあり得ず、創造は永遠に続くからです。

Page3

それでは、実存の諸世界における現れとしての人間の多様性についてはどうでしょうか？私たちは再びサイコノエティカル体の同一体にもどります。そのパーソナリティーがやるべき仕事を同一体が終了すると…そうです、それはパーソナリティーの仕事であり、何か他のものと思わないでください。全ての同一体は名前のあるその現在のパーソナリティーの特質を完全に表現しています。名前はあなたに属するものではありませんが、パーソナリティーは名前を持つことができ、それはあなた方の名前の一つかもしれません。同一体が仕事を終了すると、その同一体は他の同一体の意識のセルフ・エピグノシスのなかに入ります。もしひとつの同一体を除く他の全ての同一体が仕事を終了するとするなら、それはサイコノエティカル体が一つだけ現れていることを意味します。そして、そのサイコノエティカル体はパーソナリティーに戻ります。同一体はありません、その多様性はいまやひとつの多様性に戻ります。しかし、多様性としての全てが全てに戻るのではなく、全てが一つに、モナドへと戻るのです。

しかし、多様性からモナド・セルフの現れがある場合にはどうなのでしょうか？多様性からのモナド・セルフは多様性に戻り、全てが一つ（ワンネス）にではなくて、聖パウロが「全ては全てに」と言ったように、全ては全てへなのでしょうか？

私たちは自分のモナド・セルフを失うことは決してありません。たとえ私たちが父のもとへ、テオーシス（＊数多くの転生を経た後に到達する成長の最終段階。神との再合一）に戻ったとしても、その場合でも私たちは自己実現したスピリットなのです。他の全てのスピリット・セルフとは異なった色合いを表現するでしょう。無知を味わった後に父のもとに戻るのは息子です。ですから、生の現象の多様性、生それ自体の多様性、そして絶対存在の多様性があります。

それでは、聖霊的現れについてはどうでしょうか？人間のイデアを通じたロゴス的現れの多様性について述べてきましたが、聖霊的現れについてはどうでしょうか？この現れの結果として、意識の現れがあり、聖霊の手として、絶対存在のダイナミックな表現として様々なアークエンジェルのオーダーがあります。ここにおける多様性はどうでしょうか？生として、それら全て、全てのアークエンジェルのオーダーは同じですが、しかし各アークエンジェルのオーダーには異なったセルフ・エピグノシスがあります。それはプログラムされたセルフ・エピグノシスであり、創造界において特定の目的を表現するため、特定の仕事をするために各アークエンジェルのオーダーがあるのです。ミカエルはある特定の仕事をし、ガブリエルには別の仕事があり同じ仕事ではありません。創造界において二つのアークエンジェルのオーダーが同じ仕事をするということはありません。

そしてオーダーとして、それらにはそれぞれ独自の黙想があり、勿論それらの黙想は神の黙想のなかにあります。彼らはそれぞれのオーダーにおけるブレーシスを表現しています。そうです、それらの全て、オーダーの多様性における一つ一つのモナドは全てまさに同じ仕事をしています。無数の、無数のミカエル、無数のガブリエル、無数のラファエル、無数のウリエルその他が創造界のなかで特定の目的のために奉仕しています。そうです、オーダーとしてはそれらは多様性ですが、しかしこの多様性からの一つ一つはモナド・セルフ・スピリットの結果であり、この多様性も多様性としてのセルフに戻るのです。

今やモナド・セルフとしてのアークエンジェルはどうでしょうか？それらは多様性を現すことができるのでしょうか？人間においては、最初は多様性を表現することができず、最初は目的がなく、魂のセルフ・エピグノシスがその現れに到達したとき初めて自己実現したとみなされます。

Page4

アークエンジェルについてはどうでしょうか？例えば、ミカエルはこの多様性の質を現すことができるのでしょうか？答えはイエスです。どのようにして？アークエンジェルは創造界において必要なだけいくらでも同一体を創造することができます。それらの同一体とは何でしょうか？エンジェルたちです。エンジェルはアークエンジェルが創造したものですが、それらはプログラムされており、エンジェルたちはアークエンジェルの特質を完全にそのまま表現しているのではありません。つまり、同じプログラミングではないという意味です。各エンジェルにはやるべき別の仕事があり、現れのあらゆるバイブレーションの諸世界において、特に実存の諸世界にエンジェルたちがいます。

より低い段階においてもエンジェルがいます。多様性の現れには非常に多くのレベルがあり、人間にはそれを理解することはできません。エンジェルの場合にも別の多様性を現す能力があり、それぞれ様々な多様性を現わします。かくして、例えば、ウイルスのなかに生の最小の現れがあるのです。ウイルスというこの小さな現れが生の結果であると考えないでください。それは生それ自体の現れではありません。それは生の息吹の結果です。誰の息吹でしょうか？アークエンジェル的多様性の様々なレベルの息吹です。

ですから、アークエンジェルの結果としてこれら全ての現れがあります。

しかし、知っているとおり動物界および植物界は両方ともアークエンジェルが創造したものであり、そこには生の息吹があり、それはロゴス的セルフ・エピグノシスではなくて本能的セルフ・エピグノシスを表現しています。

それでは、魂の自己実現した人間に戻ります。魂のセルフ・エピグノシスを実現した人間です。魂のセルフ・エピグノシスは特定のオーダーのアークエンジェルの多様性を表現することができるのでしょうか？答えはイエスです。特定のオーダーのみならず、セルフ・エピグノシスが特定にプログラムされていないアークエンジェルとしての人間は、あらゆるアークエンジェルのオーダーが表現しているものすべてを表現することができます。

これが自己実現した魂のセルフ・エピグノシスの違いです。制限がなく、セルフ・エピグノシスにプログラミングもありません。なぜなら、魂のセルフ・エピグノシスとしての人間は同時に聖霊的現れであり、人間は同時にアークエンジェルなのです。人間には内側に生があり、それは生のスパークであり、それは生の結果ではなく生それ自体です。動物界および植物界はそうではありません。

ですから、実存の諸世界においてさえも多様性は完全に現れており、私たちはその理由を話しました。なぜなら、人間が自己実現したパーソナリティーとして現れることができるレベルに到達すると、実際に自らのアークエンジェル的ヒポスタシス（＊ある状態にあること）を現しており、現在のパーソナリティーとして実存の諸世界にいる間でも全てのオーダー内のアークエンジェルなのです。しかし、その人は自らのアークエンジェル的本質を表現することはできません。ヒポスタシスと本質(nature)の間には違いがあります。

さて、前のレッスンでいわゆるエーテル界について話しました。そして、エーテル界は物質界と別の世界ではないと説明しました。唯一の違いは、パーソナリティーがこれらの物質的バイブレーションのなかにおいてサイコノエティカル体と共に自分自身を表現しようとすることです。それが生じるためには、そのパーソナリティーは誰か他のパーソナリティーを通じて通信するために、物質のダブルエーテリックからエーテル・バイタリティーを使用しなければなりません。ですからエーテルによる別の体があるのではなく、そのパーソナリティーが現世のバイブレーションのなかで他の人々と通信することができるように、このエーテル・バイタリティーを身にまとうのです。

私たちはこのことを心に留めておく必要があります。誰でも肉体の死という現象によって肉体を去った後、これらのエーテルのバイブレーションを通過します。あるいはエクソマトシスという現象によってサイコノエティカル体を分離させるときも同じです。そのパーソナリティーは物質のダブルエーテリックのエーテル・バイタリティーのバイブレーションを通ります。しかし、前に述べたように、

肉体の死という現象の後にいろいろな理由でこのエーテル界に留まろうとする全てのパーソナリティーたちは、助けを得て彼らが本来属するサイコノエティカル界に入る必要があります。

私たちが多様性について述べる一つの理由として、特にこの時期において、ピラミッドについて、五芒星についてなどのエクササイズをした後で、あなた方はまた鏡のなかに自分自身を見るというエクササイズをするようにと言われました。このエクササイズに成功するようになり、特定の表面のある鏡ではなくて光だけの鏡、いわゆる光の鏡に自分自身を見ることができるようになると、鏡に一つの像だけを見る代わりに、二つ、三つ、四つ、五つの像を見る人もいるでしょう。もしあなたが前もってそれに関する知識がなければ、「自分に何が起きたのだろう、自分の視力に何が起きたのだろう」と考えることでしょう。ですから、私たちは多様性のこの能力についてもっと知る必要がありますが、しかし多くの忍耐が必要です。

質問：自己実現した人間もエーテル界を通る必要がありますか、それは法則なのでしょうか？

Ｋ：それは道なのですが、一瞬の間のことです。私たちがひとたび肉体を去ると、時間・空間という意味の影響を受けません。あっという間、おそらく時間はないかもしれませんが自己実現したパーソナリティーにとっては通過するのに十分であり、現在のパーソナリティーとして一生の間に経験したことを体験することができるのです。

なぜなら、意識のセルフ・エピグノシスの動きのスピードはあまりにも凄くて、想像を絶するほどです。寝ている間に多くの人々が夢を見ますが、寝ている間に多くの夢を見たので長い時間夢を見ていたのではないか考えますが、通常それは一瞬の出来事なのです。しかし、

**肉体における意識のセルフ・エピグノシスとサイコノエティカル体とのつながりがないので、記憶のブリッジが存在しないのです。**

質問：人間はアークエンジェルのようにアークエンジェルの全てのオーダーの多様性を表現することができるのですが、唯一の違いは人間にはアークエンジェルの本質を表現することはできない、ということなのでしょうか？そのポイント、違いをもう少し話していただけますか？

Ｋ：私たちが本質と言うとき、それは生それ自体の本質を意味します。私たちは生の現象として現れる最高のレベルに到達した現在のパーソナリティーとしての生の現象について述べました。ご存知のように、現在のパーソナリティーの素質的可能性のサイクルがあります。たとえそれらの可能性を完全に表現しているパーソナリティーであっても、そのパーソナリティーは生それ自体の特質を完全に表現しません。勿論、それは同じ状態にあります。前のレッスンで述べたように、

あるパーソナリティーが自己実現に達すると、パーソナリティーがそのレベルに到達すると、そのポイント以降の全てのパーソナリティーは皆、実存界に存在することができます（もし必要なら、再び誕生することなく存在します）。

その新しいパーソナリティーは通常の仕方で表現されますが、自己実現に到達したパーソナリティーの以前の全てのパーソナリティーは奉仕するために存在することができます。なぜなら、それらはいろいろなパーソナリティーとして転生する永遠のアトム、その乗り物、そのスパークと超意識的につながっているからです。ですから、人間はこれらの諸世界に留まるのであり、存在の諸世界、生それ自体の諸世界、つまり最愛のお方の世界に入ることはしません。

下向きの三角形がありますが、それはロゴスによる汎宇宙的キリストロゴスとしての創造界への下降を現わします。そしてまた、上向きの三角形があり、その上向きの三角形の底辺には十字架がついています。その十字架は（現在のパーソナリティーが提供すべきものをその人間が活用した後に）キリストロゴスと出会うポジションに上昇した人間を示しています。その人間は今や、ロゴス的現れおよび意識の現れのバランスの取れた表現を現しています。ですから、そこで人間は実際に主と一体になるのです。

さて、二回目の甦り（よみがえり）についてはどうでしょうか？それはいつ生じるのでしょうか？私たちはいつ魂としてここに来るのでしょうか？実際、それはここです。ここからここへの距離はどのぐらいでしょうか？距離はありません。人間がそのポジションに到達すると、それらの生それ自体の諸世界に入るのを止めるものは何もありません。しかし、何かがその人間を止めるのです。

**人間がそのポジションに到達するということは、その人間が愛の現われであることを意味します。そして、そのような愛がその人をここに留めるのです。**

その人の現れはそれらの（＊生それ自体の）諸世界に該当しますが、しかし永遠のアトムは生それ自体に入る代わりに留まります。

**私たちが永遠のアトムと呼ぶその微細なスパークは、同胞の人間を助けるために留まり、他のパーソナリティーに、そしてまた別のパーソナリティーに転生するのです。ですから、二度目の甦りはこのポジションにおいてあり、全ての人間のためではなくてその個人のためにあります。**それは実際、主へ戻ることです。

私たちは常に主、絶対、主の聖性に抱かれています。

エクササイズ/SPA10/KE5/11.NO.1

目を閉じて静かに座り、心を騒がせているもの全てを解き放ちます。真っ白な自分自身をイメージし、自分の形の境界を感じます。それでは心地よく呼吸を始めます…息を吸い込みますが、息を吸うたびに白い自分自身がより一層白くなっていきます。そして息を吐くたびに、白い自分自身についているシミ、汚点が全て消えていくように願います。深くて心地よい呼吸を続けます…息を吸うごとにあなたはより白くなり、息を吐くたびに白い自分にある汚点、よごれがきれいになっていきます。深くて心地よい呼吸を続けます…あなたはますます輝いていきます…今や白い自分自身に汚れ、汚点が全く見えない状態になりました。しかし、身体全体にむずむずする感じ、ぴりぴりする感じがします。息を吸うときに、あなたは身体全体で息を吸い込んでいるのがわかります…自分の身体のあらゆる細胞、分子、原子の呼吸を活性化したのです…全身で息を吸い込んでいます。息を吐くときも同じです…全身から息を吐いています。今や身体全体で深くて心地よい呼吸をしています。このように呼吸を続けていくとあなたの輝きがとても強くなり、今やあなたはあらゆる方向に白い輝きを放射しています…同胞である人間の健康を願ってください…この白い輝きをあらゆる方向に伸ばし、同胞の人間たちがこの白い輝き、純粋で清浄な光によって包まれているのを見ます。その清浄な純粋さはあなたをも清浄にします。主の忍耐に対して、そして主の愛に対して感謝します。最愛のお方の愛と祝福があなたと共に、あなたの愛する人々と共に、そしてあなたの家庭に、世界全体と共にあります。

私たちは常に主、絶対、主の聖性に抱かれています。

EREVNA/SPA10.DOC/PYRMY11.KE5/SE